

<はしがき>

学力低下や学力格差の拡大などが問題化される一方、今後の社会で必要とされる新しい学力を形成することも求められている。その錯綜した状況のなかで、基礎学力を形成するシステムを構築していくためには、日本の学力形成システムの現状を冷静にとらえ直すことが急務である。そこで本研究は、中学生の学力形成の状況がどのようなものであり、そこに学校はどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的としている。

その目的の達成を達成するため、本研究では、学力調査と質問紙調査を複数回にわたって実施するとともに、対象となった学校の1つにおいてフィールドワークを行うことによって、中学生の学力格差の状況がどうなっているのか、格差にはどういった要因が関わっているのかについて多面的に探究した。

学力格差については、保護者の経済的状況や文化的状況によって影響されていることはこれまでも指摘されている。またさらに最近では、学力の形成に大きく関与している「学習意欲」についても、階層による格差があることが明らかになっている（インセンティブ・ディバイド）。それらを踏まえ、本研究では学力格差について次の三つの側面から接近することにした。第一に、学力格差や意欲格差に対し、学校はどのような役割を果たしているのかという側面、第二に、学力格差とその要因はどのように変化するのかという側面、そして最後に、いわゆる「学力」だけではなく、PISA型といわれる「学力」についてはどのような状況にあるのかという側面である。これら三つの側面から考察することにより、現代日本における学力形成システムの現状について迫っていくことにしたい。

なお、本研究の調査対象は東京都S区の中学校である。東京都S区は23区の西部に位置しており、人口50万人を越える比較的大きな自治体である。対象校の教師によれば、教育に対する住民の意識や子どもたちの学力水準も全体的に高いと目される地域である。もちろんそのなかには、必ずしも経済的・文化的環境に恵まれない子どもたちも存在しており、むしろ格差状況をとらえるのに適した地域だと考えられるだろう。

< 研究組織 >

研究代表者：藤田武志（上越教育大学学校教育学部助教授）

< 交付決定額（配分額） >

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成16年度	1 3 0 0 0 0 0	0	1 3 0 0 0 0 0
平成17年度	8 0 0 0 0 0	0	8 0 0 0 0 0
平成18年度	9 0 0 0 0 0	0	9 0 0 0 0 0
総 計	3 0 0 0 0 0 0	0	3 0 0 0 0 0 0

< 研究発表 >

学会誌等

- ①藤田武志「意欲格差と学校 ―東京都S区の事例から―」『教育経営研究』第12号、2006年5月、70-79頁。
- ②藤田武志「」『教育経営研究』第13号、2007年6月（印刷中）。

【目 次】

はしがき	1
研究組織・経費	2
研究発表	2

第 1 部 研究論文

第 1 章 意欲格差と学校	5
第 2 章 学力格差の経年変化	18
第 3 章 P I S A 型学力の状況	29

第 2 部 資 料

質問紙調査票

学力調査【国語】

学力調査【数学】

学力調査【P I S A 型】

【第 1 部 研究論文】

第1章 意欲格差と学校

1. はじめに

日本では現在、格差社会化がさまざまな側面から指摘されている（橋木 1998、佐藤 2000、橋本 2001、樋口他編 2003、三浦 2005）。教育についても例外ではなく、学力低下をめぐる問題（市川 2002、荻谷 2001、荻谷他編 2004）や、フリーターやニートに関する問題（小杉 2003、玄田他 2004、小杉編 2005、本田他 2006）など、各種の格差が問題化されている。

そのような動きに対応し、全国各地で実施されている学力テストをはじめとして、基礎学力重視に向けたさまざまな動きが学校現場を覆い始めている。しかし、そういった試みが格差の是正に結びついているか検証されているとは限らないばかりか、学校別や地域別のテスト結果が公表されることなどが、かえって弊害をもたらしてしまう可能性も否定できない（藤田 2005）。また、テストやドリル学習などを通して学力向上をはかることは、かえって学びからの逃走を促進してしまったり（佐藤 2000）、学習へと向かう意欲の格差（「インセンティブ・ディバイド」（荻谷 2001））を進めてしまったりしかねない。

そのようななかで、家庭環境の違いがもたらす学力格差を確実に是正している学校（「力のある学校」「効果のある学校」）が存在していることが指摘され始めている（鍋島 2003、志水 2003, 2005）。志水らは、特に小学校における実践に焦点を当て、力のある学校のありようを紹介している。では、中学校はどのような状況にあるのだろうか。また、志水らの強調する学力格差という側面ではなく、荻谷の主張する意欲格差については個々の学校においてどのような状況にあり、その是正についてどう取り組んでいったらいいのだろうか。

そこで本章では、中学校において、家庭環境が学習への意欲に影響を与えている意欲格差がどのような状況にあるのか、意欲格差は個々の学校においてどのように立ち現れているのかについて事例をもとに検討し、それを通して、意欲格差の是正に対する学校の取り組みに関する示唆を得ることを主題とする。

2. 方法

本章で用いる主たるデータは、東京都S区の中学校3校の1年生全員（240名）を対象に、2004年2月～3月にかけて実施した質問紙調査によるものである。また、それを補うため、上記3校のうち1校において2003年から継続して行っている観察調査で得られたデータも用いる。

質問紙調査を実施した3校のプロフィールは次の通りである^{*1}。まずA中は、学級数11、緑の多い閑静な住宅街の一角に位置しており、教育熱心な保護者と同窓会の力強い応援を受け、地域の人々とも連携を図りながら教育活動に当たっている中学校である。次にB中は、学級数8、住宅街に位置しており、落ち着いた環境のなかで生徒たちは自由な校風のもとでのびのびとした学校生活を送っている学校である。最後にC中は、学級数6、商店街と住宅街の混在した地域に位置しており、先生と生徒のきめ細やかなコミュニケーションのもとで、生徒たちが活気のある生活を送っている中学校である。

質問紙調査では主に、家庭学習の様子、学校での学習態度、保護者の行動や属性、保護者に対する意識などを尋ねている。また、観察調査は月に2度程度、授業前から放課後まで学校に入り込み、授業のようすなどを密着して観察した。

3. 学習意欲と学校

（1）学習意欲の状況

調査対象となった中学1年生の学習への意欲はどのような状況にあるのだろうか。学校の授業（表1）と家庭学習（表2）への構えという2つの側面から見てみることにしよう。

まず、学校の授業については、ほとんどの生徒が「先生が黒板に書いたことはしっかりとノートにとる」と回答している。また、調べ学習のような学習形態の際にも、約6割の生徒は積極的に活動すると答えている。しかし、グループ学習で仲間をリードしていくような生徒は3割程度であり、「授業で分からないことをあとで先生に質問する」というような、授業以外の時間を越えた学習への積極性を示す生徒は36%程度にとどまっている。

^{*1} 以下の記述は、S区教育委員会のホームページに掲載されている各学校の紹介文を参考にした。

表1 授業への構え(%)

先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる	94.1
調べ学習の時は積極的に活動する	57.4
授業でわからないことをあとで先生に質問する	36.4
グループ学習の時は、まとめ役になることが多い	33.8

次に、家庭での学習については、「出された宿題はきちんとやる」と回答した生徒が8割を越えており、「きらいな科目の勉強でも、がんばってやる」という生徒も6割程度存在している。しかし、「家の人に言われなくても、自分から進んで勉強する」という自発的な学習習慣をもつ生徒は約5割であり、「授業で習ったことについて、自分でくわしく調べる」ような探求心のある生徒は23%程度である。

表2 家庭学習への構え(%)

出された宿題はきちんとやる	83.6
きらいな科目の勉強でも、がんばってやる	60.1
家の人に言われなくても、自分から進んで勉強する	49.6
授業で習ったことについて、自分でくわしく調べる	23.5

以上のように、中学1年生ということもあってか、ノートをとったり、宿題をやったりといった基本的な学習習慣については、多くの生徒が肯定的な回答をしている。しかし、それ以上の積極性や自発性などについては、肯定的ではない回答をする生徒が増加している。中学校1年生という初期段階におけるこのような小さな差異が積み重なっていくことが、その後の大きな格差につながっていくとも考えられる。では、そういった差異に対し、家庭環境など、生徒自身にはいかんともしがたい要因は影響を与えているのだろうか。

(2) 文化的階層の学校ごとの分布状況

生徒たちの家庭環境は、どのように異なっているのだろうか。そのあたりを確かめるべく、職業や収入などの階層要因を子どもたちへのアンケート調査で尋ねることは困難であり、たとえ聞いたとしても正確な回答が得られるとは限らない。そこで本調査では、学習

に取り組みやすい文化的環境として生徒たちの家庭環境をとらえ、その違いが学習への意欲にどう関係しているのかをとらえていくことにする*1。

まず、家庭の文化的環境の分布状況を概観しておきたい（表3・表4）。家の人が勉強を見てくれると回答している生徒は約43%、博物館や美術館に連れていってくれるという回答は63%、手作りのお菓子を作ってくれるという生徒は約3割というように、保護者の文化的な行為には家庭による違いが存在している。

表3 家庭の文化的環境①(%)

	とても	まあ	あまり	あては まらず	合計
家の人に勉強をみてもらうことがある	13.1	29.7	32.3	24.9	100
家の人に博物館や美術館に連れていって もらったことがある	35.2	28.2	20.7	15.9	100
家の人が手作りのおかしをつくってくれる	9.3	21.6	27.3	41.9	100

一方、本やコンピュータなどの文化的な財の所有状況については、多数の生徒が肯定的に回答している。とはいえ、特に書籍の場合は約4人に1人は否定的に答えており、格差の存在をうかがわせる。

表4 家庭の文化的状況②(%)

	はい	いいえ	合計
家には本がたくさんある	76.0	24.0	100
家にはコンピューターがある	82.5	17.5	100

これらの設問を用い、主成分分析によって合成変数を作成した（以下、「文化的階層」と呼ぶ）。では、この変数を用いて、以下、意欲格差の状況について調べていくことにし

*1 このようなやり方で生徒の家庭環境をとらえて分析した研究に荏谷・志水編（2004）がある。

よう。

4. 意欲格差の状況

得点の上位50%を文化的環境の豊かな群、下位50%を厳しい群とした場合、それら2つの群の間には学習意欲の格差が存在しているのだろうか。授業と家庭学習への構えについて、文化的階層別に検討してみよう（表5・表6）

まず、授業への構えについて、ほとんどの生徒が肯定していたノートについては、階層による違いは見られない。しかし、それ以外のものについては、授業への構えと文化的階層の関係は有意であり、豊かな群の生徒ほど肯定する割合が高い。

表5 授業への構えと文化的階層(%)

	豊かな群	厳しい群	有意水準
先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる	97.4	91.8	
調べ学習の時は積極的に活動する	69.9	43.1	***
授業でわからないことをあとで先生に質問する	46.5	25.7	**
グループ学習の時は、まとめ役になることが多い	43.6	24.1	**

(*** $p < .000$, ** $p < .01$, * $p < .05$ χ^2 二乗検定)

次に、家庭学習への構えについてはどうだろうか。表に明らかなように、いずれの場合も家庭学習への構えと文化的階層の関係は有意であり、豊かな群の生徒の方が設問を肯定する率が高い。

表6 家庭学習への構えと文化的階層(%)

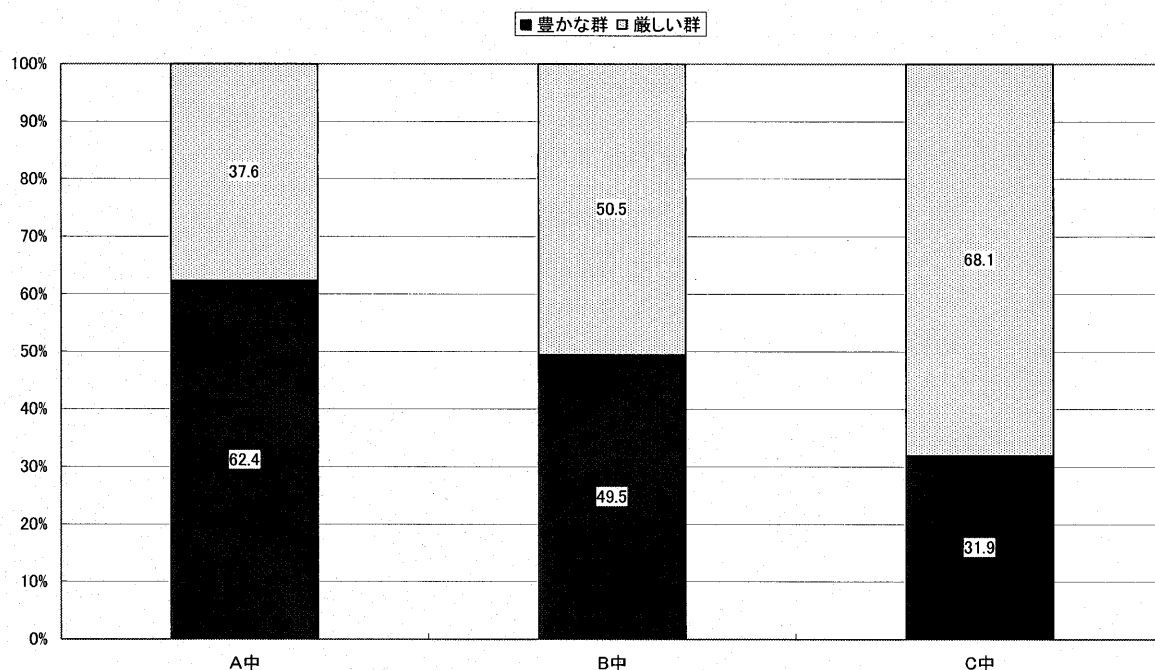
	豊かな群	厳しい群	有意水準
出された宿題はきちんとやる	91.2	77.5	**
きれいな科目の勉強でも、がんばってやる	72.8	47.7	***
家の人に言われなくても、自分から進んで勉強する	57.0	41.4	*
授業で習ったことについて、自分でくわしく調べる	34.2	12.6	***

(*** $p < .000$, ** $p < .01$, * $p < .05$ χ^2 二乗検定)

以上のように、文化的階層によって学習への意欲に格差があることが確認された。つまり、学習に取り組みやすい家庭環境に恵まれた生徒ほど学習への意欲が高いのである。そして特に、調べ学習への意欲（26.8ポイント差）や、きれいな科目の勉強（25.1ポイント差）など、より高い自発性が要求されるような事項において2つの群の差が大きいようである。

では、このような意欲格差の状況は、それぞれの学校において同じように現出しているのだろうか。というのも、図1に示したとおり、文化的階層における「豊かな群」の多い学校（A中）と「厳しい群」の多い学校（C中）というように、学校によって階層の分布状況に明らかな違いがあるからである。

図1 文化的階層の学校ごとの分布状況(%)



そこで、各学校の文化的階層の分布状況に応じ、学習への意欲も学校によって違っているのかどうか確かめてみた（表7・表8）。すると、いずれの項目についても授業への構えと学校との関係は有意ではないという結果になった（ χ^2 二乗検定）。すなわち、学校によって文化的階層の分布状況は異なっているにもかかわらず、意欲の学校間の違いは見られないのである。これはいったいどのようなことなのだろうか。さらに探っていくことにしたい。

表7 授業への構えと学校(%)

	A中	B中	C中
先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる	95.4	94.2	91.5
調べ学習の時は積極的に活動する	60.9	56.9	52.2
授業でわからないことをあとで先生に質問する	39.1	29.1	47.8
グループ学習の時は、まとめ役になることが多い	28.6	38.0	34.0

表8 授業への構えと学校(%)

	A中	B中	C中
出された宿題はきちんとやる	80.5	86.5	83.0
きらいな科目の勉強でも、がんばってやる	65.5	58.7	53.2
家の人に言われなくても、自分から進んで勉強する	54.0	43.3	55.3
授業で習ったことについて、自分でくわしく調べる	27.6	19.2	25.5

5. 意欲格差と学校

文化的階層によって意欲格差が存在しており、文化的階層の割合が各学校によって異なっているならば、当然の帰結として、学習への意欲は学校によって異なっているはずである。しかしそこに違いが見られないとしたら、それはどうしてなのだろうか。

その点を探るため、学習意欲と文化的階層の関係を学校別に調べてみた(表9・表10)。その結果、まず、授業への構えについては、3つの項目で有意差がみられた。すなわち、「授業で分からないことをあとで先生に質問する」という項目は、A中において文化的階層との関係が有意であり、「調べ学習の時は積極的に活動する」という項目は、同じくA中とB中において有意、「グループ学習の時は、まとめ役になることが多い」という項目はB中で有意、という結果になったのである。そしていずれの場合も、豊かな群の方が肯定する割合が高かった。

A中とB中では、学習への構えと文化的階層と文化的階層との関係が有意になることが多いのに対し、C中ではその関係は有意ではない。つまり、A中とB中では文化的階層が学習意欲の形成に影響を及ぼす状況にあるのに対し、C中ではその影響が小さいのである。

表9 学校別にみた授業への構えと文化的階層(%)

		豊かな群	厳しい群	有意水準
先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる	A中	96.2	96.9	
	B中	97.8	91.3	
	C中	100.0	87.5	
授業でわからないことをあとで先生に質問する	A中	50.9	18.8	**
	B中	37.0	19.6	
	C中	60.0	41.9	
調べ学習の時は積極的に活動する	A中	73.6	40.6	**
	B中	73.3	37.0	***
	C中	46.7	54.8	
グループ学習の時は、まとめ役になることが多い	A中	34.0	21.9	
	B中	55.6	20.5	**
	C中	40.0	31.3	

次に、家庭学習の構えについては、「出された宿題はきちんとやる」という項目においてC中だけ有意差がみられたが、それ以外の4つの項目では、A中とB中においてのみ学習への構えと文化的階層との関係が有意であった。やはり、授業への構えと同様に、文化的階層が家庭学習への構えに及ぼす影響は、A中とB中において強く、C中において弱いという傾向を見てとることができるのである。

以上のことから、学校によって文化的階層の分布状況は異なっているとしても、意欲の学校間の違いは見られなかったことは、C中学校において意欲格差が小さく、厳しい群の意欲が底上げされていたことに起因していると考えられる。

C中学校の分析結果が、当該学校の実践のありようによって意欲格差という不平等が是正されたことを示しているとすれば、志水などが学力格差の是正について指摘するように(志水 2005、鍋島 2003)、意欲格差の是正についても学校効果が存在していることが示唆される。

表10 学校別にみた家庭学習への構えと文化的階層(%)

		豊かな群	厳しい群	有意水準
出された宿題はきちんとやる	A中	86.8	75.0	
	B中	93.5	80.9	
	C中	100.0	75.0	*
きれいな科目の勉強でも、がんばってやる	A中	77.4	50.0	**
	B中	71.7	44.7	**
	C中	60.0	50.0	
家の人に言われなくても、自分から進んで勉強する	A中	60.4	43.8	
	B中	52.2	31.9	*
	C中	60.0	53.1	
授業で習ったことについて、自分でくわしく調べる	A中	39.6	9.4	**
	B中	26.1	10.6	*
	C中	40.0	18.8	

6. C中学校の生徒の状況と実践

では、C中ではどのような状況の生徒たちに対し、どのような実践が行なわれているのだろうか。

生徒たちの状況として挙げられるのは、前述の通り、厳しい群に属する生徒の割合が非常に高いことである。そして、教師たちの実践も、自ずとそのような背景を持った生徒を対象としたものとなっていると考えられる。

そのことは、次のデータからもうかがわれる。すなわち、表11に示したように、C中の生徒は家庭学習として、学校の勉強の復習をしていると回答する生徒の割合が、他の学校に比べて非常に高く、自分にとって必要なものとして、学校を挙げる割合もかなり高いのである^{*1}。C中のようすを観察したところでは、生徒が自分にとって必要だと思われる内

*1 通塾率が学校によって異なっているわけではない。塾に通っていないという回答は、A中は42.5%、B中は46.7%、C中は43.8%と、ほぼ同様である。

容についてノートを使って復習し、それを教師に提出する「復習ノート」の試みを行っていた。

表11 学校別にみた勉強に対する意識(%)

		A中	B中	C中	有意水準
家でする勉強の種類は学校の勉強の復習	いつもする	9.3	7.8	40.4	***
	ときどき	50.0	53.9	51.1	
	しない	40.7	38.2	8.5	
私の勉強にとって必要なのは	学校	16.3	34.0	50.0	**
	塾	44.9	20.8	8.3	
	どちらとも	38.8	45.3	41.7	

また、授業についても、C中では他の学校と異なっていることが生徒の意識を通じてうかがわれる。たとえば、自分の受けている授業の特徴について尋ねた設問の回答をみると（表12）、数学の授業では、他の学校がドリルやテストをしたり、教科書や黒板を中心に進める講義中心の授業が特徴であると回答する生徒の割合が高いのに対し、C中では必ずしもそうではない。観察調査では、教師の自作のプリントを中心に用い、それぞれの生徒に個別に対応する授業をしている姿を見ることができた。一方、国語の授業は、ドリルや小テストをする一方で、考えたり発表したりすることも行うような多様な授業方法が用いられていると意識されていることが分かる。そのことは観察調査のなかでも確認されている。

さらに、数学や国語の授業以外でも、特に総合的な学習の時間において、一般企業のビジネスマンと一つのプロジェクトに取り組む試みをはじめとする、非常にユニークな実践を行っていた。

このようにC中では、恵まれた家庭環境にあると必ずしもいえない子どもたちに直面するなかで、その生徒たちの興味や関心を喚起しながら、それを学習へとつなげようと試みていることが看取される。そしてそれが、意欲格差を生じさせないという学校効果をもたらしているのではないだろうか。

表12 学校別にみた授業の特徴(%)

	A中	B中	C中	有意水準
数学の授業の特徴:ドリルや小テストをする授業	82.8	47.1	37.0	***
数学の授業の特徴:教科書や黒板を使う授業	98.9	100.0	89.1	***
国語の授業の特徴:ドリルや小テストをする授業	55.2	81.7	87.2	***
国語の授業の特徴:自分で考えたり、 調べたりする授業	82.6	90.4	97.9	*
国語の授業の特徴:自分たちの考えを 発表したり、意見を言い合う授業	65.5	82.7	91.5	**

7. おわりに

本章では、学校における意欲格差の是正に関する示唆を得るため、意欲格差の状況を確認し、それが個々の学校においてどのように現出しているのかを検討してきた。そこで得られた知見は、次の4つにまとめることができる。

第一に、家庭環境による学習意欲の格差は確かに存在している。また、第二に、家庭環境の分布状況は学校によって異なっている。しかし、第三に、学習への意欲に対する家庭環境の影響はどの学校でも同じなのではなく、家庭環境の影響が強い学校と弱い学校が存在している。そして第四に、意欲格差を縮める効果を発揮している学校では、当該学校の状況に対応した実践を工夫している。

では、これらの知見から個々の学校における意欲格差の是正についてどのような示唆を得ることができるだろうか。

意欲格差を是正するC中学校の効果は、学力向上を目指すなかで多く行われている学力テストやドリル学習ではなく、子どもたちが学校を頼りにすることと、教師が子どもたちの興味や関心を高める授業実践を試みることの両者が、相補的に働くことによって達成されていたのではないかと考えられる。

それに対し、文化的階層の相対的に高い中学校には、意欲の高い生徒は学校ではなく塾などの学校外教育機関をますます頼りにし、意欲の低い生徒は学校からもこぼれおちていき、結局のところ意欲格差が拡大していくといった、いわば「学校の空洞化」とも言うべ

き事態が進行していく可能性がある。

自らの中学校でどのような事態が生じているのかをとらえ、対策を考えていくためにも、各学校では、自校における文化的階層の布置状況や意欲格差の状況をきちんと把握し、分析することが必要だろう。そして、そこで見いだされた事態に対応した教育実践を組み立て、さらにその効果を確かめていくことになるだろう。

いずれにせよ、ムードに流された改革や「情動的事実」（酒井 2006）に基づく改革ではなく、経験的な事実をきちんと検討しながら、じっくりと取り組む改革が必要であることは間違いない。

<引用・参考文献>

藤田英典 2005、『義務教育を問い直す』筑摩書房。

玄田有史・曲沼美恵 2004、『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎。

橋本健二 2001、『階級社会 日本』青木書店。

樋口美雄・財務省財務総合政策研究所編 2003、『日本の所得格差と社会階層』日本評論社。

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 2006、『「ニート」って言うな！』光文社。

市川伸一 2002、『学力低下論争』筑摩書房。

荻谷剛彦 2001、『階層化日本と教育危機 不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。

荻谷剛彦・志水宏吉・清水睦美・諸田裕子 2002、『「学力低下」の実態』岩波書店。

荻谷剛彦・志水宏吉編 2004、『学力の社会学 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店。

小杉礼子 2003、『フリーターという生き方』勁草書房。

小杉礼子編 2005、『フリーターとニート』勁草書房。

三浦展 2005、『下流社会 新たな階層集団の出現』光文社。

鍋島祥郎 2003、『効果のある学校 学力不平等を乗り越える教育』解放出版社。

酒井隆史 2006、「経験的事実から情動的事実へ ―コントロール社会の一指標―」財団法人塩事業センター『知のWebマガジン en』（<http://www.shiojigyo.com/en/column/0605/index.cfm>）

佐藤学 2000、『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店。

佐藤俊樹 2000、『不平等社会日本 さよなら総中流』中央公論新社。

志水宏吉 2003、『公立小学校の挑戦 「力のある学校」とはなにか』岩波書店。

志水宏吉 2005、『学力を育てる』岩波書店。

橘木俊詔 1998、『日本の経済格差 所得と資産から考える』岩波書店。

基礎学力研究開発センター編 2006、『日本の教育と基礎学力 危機の構図と改革への展望』明石書店。

第2章 学力格差の経年変化

1. はじめに

さまざまな側面における社会的格差が指摘されるなか、学力についても階層による格差が拡大していることが指摘されている。

それらの調査研究では、10年余りのときを隔てた学力の変化とその規定因が検討されている。では、同一の子どもたちについては、階層による学力差はどのように変化していくのだろうか。また、その変化には、どのような要因が関わっているのだろうか。

これまで、学力の規定因について横断的に検討した研究や、学力の変化について異なるサンプルを用いて継断的に分析した研究は見られるものの（荻谷他 2002、荻谷・志水編 2004など）、パネル調査によって学力の変化と、そこに及ぼす社会的な要因の影響を探ったものは少ない^{*1}。

そこで本章では、東京都S区の2つの中学校の1年生に対して行われた学力テストと質問紙調査、その学年が3年生になったときに行われた学力テストと質問紙調査を比較することによって、学力格差とその規定因について検討する。

2. 研究方法

調査に回答してくれたのは、東京都S区立の2つの中学校（S中・W中）に2003年4月に入学した生徒たちである。生徒たちが1年生時の2004年2～3月と、3年生時の2006年2～3月の2回、学力テストと質問紙調査を行った。なお、分析の対象とするのは、2回とも回答した135名の生徒たちである（S中：93名、W中：42名）。

学力テストの内容は、第1回が小学校6年間の学習の総復習（以下、「国語(2003)」、「算数(2003)」と表記する）、第2回が中学校3年間の学習の総復習であった（以下、「国語(2

*1 パネル調査によって継時的な変化への社会的な要因の影響を分析したものもあるが（たとえば、耳塚他 1983、耳塚 1986など）、学力として成績の自己評価を代替的に用い、独立変数として分析を行っている。

005)」、「数学(2005)」と表記する)。また、質問紙調査の内容は2回ともほぼ同じで、家庭学習の様子、学校での学習態度、保護者の行動や属性、保護者に対する意識などを尋ねている。

3. 調査結果の概要

まず、2回にわたって行った学力テストの結果を概観しよう。

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
国(2003)	39.1	100.0	86.6	10.7
算(2003)	21.7	97.7	76.2	14.9
国(2005)	11.5	100.0	57.4	21.7
数(2005)	13.0	100.0	67.7	21.3

表1 学力テストの記述統計量

表1と図1・2に明らかなように、第1回テスト(2003)に比べ、第2回テスト(2005)では国語も数学の両方とも平均値が大幅に下がり、分散も大きくなっており、2年の間に、学力の格差が確実に広がっていることが分かる。特に、数学については2極化傾向が顕著に見られる。

図1 学力テスト正答率の分布(2003)

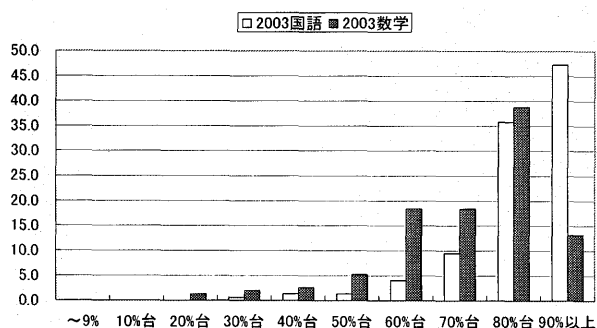
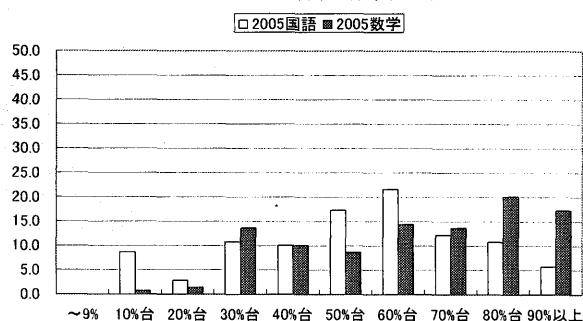


図2 学力テスト正答率の分布(2005)



では、このような違いの見られる2003年と2005年では、学力に対する社会階層や努力の影響のありようは異なっているのだろうか。また、そこには国語と数学という科目による違いはあるのだろうか。さらに、個人個人の変化にはどういった要因が関係しているのだ

ろうか。

これらの点について検討するため、第1に、2003年と2005年の学力テストの全体的な規定要因について探る。そして第2に、2つのテストの間の個人の変化に及ぼす要因を分析する。これらの作業を通して、学力格差の経年変化のありさまの一端を明らかにしていくことにしたい。

4. 学力の規定要因 ―社会階層と努力―

まず、学力に対する社会階層と努力の影響について見ていこう。ここでは、社会階層の指標としては父親の学歴（大卒か非大卒か）を用い、努力の指標としては家庭での学習時間を用いることにする。

まず、表2に学力テストの平均正答率を社会階層別に示した。いずれのテストにおいても、父親が大卒の場合の方が平均正答率が有意に高い。2003年と2005年の両方とも、社会階層の影響を受けていることが分かる。

全体	国語(2003)	国語(2005)	算数(2003)	数学(2005)
父大卒	89.5	62.5	80.0	73.7
父非大卒	82.3	47.4	70.9	56.8
N	124	124	128	124
有意確率(T検定)	0.000	0.001	0.001	0.000

表2 社会階層別に見た平均正答率(%)

次に、努力の量によって学力が異なるかどうかを確かめよう。表3には、それぞれの学力テストを行った時期の家庭学習時間別に学力テストの平均正答率を示した。2003年の学力テストでは、学習時間が異なっても平均正答率があまり大きく変化しないのに対し、2005年には、一部例外があるものの、学習時間が多い方が平均正答率が高くなるという傾向が見られる。分散分析の結果、2003年の学力テストは算国両方とも学習時間の影響が有意ではないのに対し、2005年の学力テストでは、国数いずれも有意である。

このように、社会階層については2003年と2005年の両方において影響が見られる一方、努力については、2005年のみに影響が見られることが分かった。2003年の学力テストは、小学校6年間の復習というすでに履修済みの内容であるため、学力テストを行った中学校1年の2月時点における学習時間の影響が見られないと考えられる。

全体	国語(2003)	国語(2005)	算数(2003)	数学(2005)
15分まで	84.0	47.8	73.6	61.2
30分まで	89.3	48.3	77.9	50.2
1時間まで	86.4	53.2	75.9	63.7
1時間以上	87.1	64.0	77.9	74.3
合計	86.7	56.9	76.3	67.1
有意確率(分散分析)	0.254	0.003	0.576	0.001

表 3 勉強時間別に見た平均正答率 (%)

では、社会階層と努力の量を同時に考慮した場合には、学力に対してどのように影響を及ぼしているのだろうか。その点について、重回帰分析によって検討していこう。

まず、2003年の学力テストの規定要因について検討する。投入した変数は、社会階層（父大卒ダミー）：モデル1、家庭学習時間：モデル2、社会階層と家庭学習時間：モデル3である。表4と5に示したように、2003年の学力テストについては、国語も算数も社会階層だけが有意であり、先ほどと同様の結果が得られた。しかし、国語と算数のモデル1を見てみると、国語(2003)の調整済みR²乗値が0.139であるのに対し、数学(2003)では0.071にすぎない。つまり、社会階層の影響は国語の方が大きいようである。

続いて、2005年の学力テストについて見ていこう。国語と数学の両方とも、先ほどの分析と同様、父親の学歴と学習時間はともに有意な影響を与えている（モデル1・モデル2）。しかし、モデル1の調整済みR²乗値を見ると、国語(2005)が0.113、数学(2005)が0.127と、2003年の結果とは逆に、数学の方がむしろ大きくなっている。社会階層の影響力が数学にも大きく及ぶようになっている。

国語(2003)	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	β		B	β		B	β	
(定数)	77.430		***	79.589		***	76.102		***
性別	3.488	0.175	*	4.360	0.202	**	3.508	0.175	*
父大卒ダミー	7.236	0.352	***	-	-	-	7.388	0.356	***
家庭勉強時間	-	-	-	0.014	0.071		0.018	0.100	
adj. R square	0.139			0.035			0.146		

表 4 国語(2003)の規定要因

算数(2003)	モデル1		モデル2			モデル3	
	B	β	B	β		B	β
(定数)	70.163	***	74.948	***		69.112	***
性別	0.543	0.018	-0.204	-0.007		0.343	0.011
父大卒ダミー	9.043	0.293 **	-	-	-	8.919	0.289 **
家庭勉強時間	-	-	0.027	0.100		0.023	0.086
adj. R square	0.071		-0.004			0.068	

表 5 算数(2003)の規定要因

国語(2005)	モデル1		モデル2			モデル3		モデル4	
	B	β	B	β		B	β	B	β
(定数)	38.135	***	45.160	***		36.483	***	-80.287	***
性別	6.645	0.147 †	3.259	0.074		5.369	0.119	-0.191	-0.004
父大卒ダミー	15.169	0.325 ***	-	-	-	13.400	0.287 **	4.121	0.090
家庭勉強時間	-	-	0.071	0.264 **		0.044	0.165 †	0.005	0.020
国語03正答率	-	-	-	-	-	-	-	1.557	0.706 ***
adj. R square	0.113		0.065			0.131		0.543	

表 6 国語(2005)の規定要因

数学(2005)	モデル1		モデル2			モデル3		モデル4	
	B	β	B	β		B	β	B	β
(定数)	58.328	***	63.104	***		55.963	***	-9.101	
性別	-1.070	-0.025	-3.016	-0.070		-2.898	-0.067	-3.436	-0.079
父大卒ダミー	16.806	0.374 ***	-	-	-	14.273	0.318 ***	5.942	0.132 *
家庭勉強時間	-	-	0.083	0.315 ***		0.063	0.245 **	0.050	0.194 **
算数03正答率	-	-	-	-	-	-	-	0.950	0.659 ***
adj. R square	0.127		0.086			0.176		0.575	

表 7 数学(2005)の規定要因

父親の学歴と学習時間を同時に投入したモデル3を見ると、国語(2005)では、父親の学歴は1%水準、家庭勉強時間は10%水準でそれぞれ有意に影響を与えているという結果になった。数学(2005)もまた、父親の学歴と家庭学習時間を同時に考慮した場合、父親の学歴が0.1%水準、家庭勉強時間が5%水準でそれぞれ有意な影響を及ぼしている。すなわち、2005年の学力テストでは、社会階層と努力は独立して学力に影響しているのである。

モデル3の結果は、社会階層にかかわらず努力次第で学力が伸びることを示していると考えられる。しかし、努力によって学力が伸びるとはいつても、2003年のテストで点数の低かった者は、努力によってそれを挽回することはなかなか難しいのではないか。しかも、2003年の学力テストの結果は、すでに社会階層によって刻印を押されているのである。2003年のテスト結果にかかわらず、2005年の学力テストの結果には努力の影響が見られるのだろうか。その点について考察するため、モデル3に加えて2003年のテスト結果を投入した（モデル4）。

モデル4を見ると、国語と数学で異なった結果が得られている。まず、国語(2005)では、調整済みR二乗値が大幅に上昇しており、2003年学力テストの結果が大きな影響を与えていることが分かる。しかも、父親の学歴と家庭学習時間がとも有意ではなくなっており、係数の値も大幅に小さくなっているのである。その一方で、数学(2005)では、調整済みR二乗値が大幅に上昇しているのは国語と同じであるが、父親の学歴と家庭勉強時間は、ともに係数の値が小さくなっているものの、有意な影響が残っている。

ここからは、小学校までの内容をどのくらい身につけているのが、中学校卒業直前の学力にも大きな影響を与えていることが分かる。特に国語では、2003年テストの正答率を分析に投入することによって、学習時間の効果が消えてしまう。この結果は、国語の学力がかなり早いうちに固まってしまうことを示しているのだろうか。また、数学で学習時間の効果が残ることは、中学校において小学校とは異なる分野の学習をも行うという教科の特徴を表しているのかもしれない。

いずれにせよ、学力の規定要因を検討していく際には、時期の問題、教科の特徴の問題をも考慮していく必要があるようである。

5. 個人の学力の変化

これまでの分析は、2003年と2005年の学力テストの全体的な規定要因に関するものであった。それゆえ、その2時点間で個々の生徒がどのように変化をしたのかは分からない。テストにおける相対的位置は固定的なのか、流動的なのか。2003年のテストに比べ、2005年のテストで相対的な位置が上昇したり、下降したりした生徒はどのくらいいるのか。相対的位置の変化には社会階層などの要因が関わっているのか。以下、それらの点について考えていくことにしたい。

それぞれの学力テストにおいて、生徒たちを正答率の高い順に上位・中位・下位という

3つのグループに等分した*1。そして、2003年の結果と2005年の結果をクロスさせたのが表8と表9である。

まず、国語の結果を検討しよう。表8は国語の結果を示しており、網をかけたセルが両方のテストで同じ位置にとどまっている人数と割合を示している。移動しない割合は、2003年に下位であったグループがいちばん高く（80.9%）、続いて2003年上位グループ（62.2%）で、2003年中位グループ（30.2%）は移動する割合がいちばん高い。全体的に見ると、約6割が固定的で、上昇移動と下降移動がそれぞれ約2割というところである。

次に、数学を見てみよう（表9）。国語に比べ、下位グループと上位グループの流動性がやや高い。すなわち、移動していないのは、2003年下位グループの71.4%、上位グループの55.0%と、国語よりも若干少ないのである。それに対し、中位グループは、国語よりも固定的で、48.0%となっている。

全体的には、国語と同様、固定的なのが約6割、上昇移動と下降移動がそれぞれ約2割ずつとなっている。

			国語(2005)			合計
			下位	中位	上位	
国語(2003)	下位	N	38	6	3	47
		国語(2003)中の%	80.9	12.8	6.4	100.0
		総和中の%	28.1	4.4	2.2	34.8
	中位	N	12	13	18	43
		国語(2003)中の%	27.9	30.2	41.9	100.0
		総和中の%	8.9	9.6	13.3	31.9
	上位	N	2	15	28	45
		国語(2003)中の%	4.4	33.3	62.2	100.0
		総和中の%	1.5	11.1	20.7	33.3
合計		N	52	34	49	135
		国語(2003)中の%	38.5	25.2	36.3	100.0
		総和中の%	38.5	25.2	36.3	100.0

表8 学力テストにおける相対的位置の変化（国語）

*1 正答率が同じ場合があるため、上位・中位・下位の3つのグループが同じ割合にならない場合もある。

			算数(2005)			合計
			下位	中位	上位	
数学(2003)	下位	N	35	12	2	49
		算数(2003)中の%	71.4	24.5	4.1	100.0
		総和中の%	25.2	8.6	1.4	35.3
	中位	N	13	24	13	50
		算数(2003)中の%	26.0	48.0	26.0	100.0
		総和中の%	9.4	17.3	9.4	36.0
	上位	N	0	18	22	40
		算数(2003)中の%	0.0	45.0	55.0	100.0
		総和中の%	0.0	12.9	15.8	28.8
合計		N	48	54	37	139
		算数(2003)中の%	34.5	38.8	26.6	100.0
		総和中の%	34.5	38.8	26.6	100.0

表9 学力テストにおける相対的位置の変化（数学）

では、2003年に比べて2005年の相対的位置が上昇した者、下降した者には、移動しなかった者と比べて、社会階層や努力に何らかの違いが見られるのだろうか。その点を検討するため、まずは父親の学歴と、相対的位置の変化との関係を検討することにしよう。

表10は、2003年の国語テストでの学力グループ別に、相対的位置と父親の学歴との関係を見たものである。2003年に学力が下位のグループだった者は、両者の関係が10%水準で有意であり、父親が大学を出ていないほうが下位にとどまる割合が高く、大学を出ているほうが「上昇」の割合が高くなっている。また、中位だったグループは、残差分析の結果、「変化なし」についてのみ父親の学歴との関係が有意であり、父親が大学を出ていないほうが中位にとどまる割合が高い。

それに対し数学では、表11に示したように、2003年に学力が上位のグループだった者についてのみ、相対的位置と父親の学歴との関係が10%水準で有意であり、父親が大学を出ていないほうが「下降」の割合が高く、大学を出ているほうが「変化なし」の割合が高いのである。

次に、努力と、学力の相対的位置の変化との関係はどうだろうか。その点について検討するため、両時点で変化がなかったグループと、移動したグループとの間で家庭学習時間

の平均値を比べてみた。

03年学力グループ	05年の変化	お父さんは大学を出ている		有意確率
		いいえ	はい	
下位	変化なし	90.0	66.7	0.071
	上昇	10.0	33.3	
	n	20	21	
中位	下降	23.1	33.3	0.130
	変化なし	53.8	22.2	
	上昇	23.1	44.4	
	n	13	27	
上位	下降	28.6	34.4	0.768
	変化なし	71.4	65.6	
	n	7	32	

表10 父学歴と学力の相対的位置の変化の関係（国語）

03年学力グループ	05年の変化	お父さんは大学を出ている		有意確率
		いいえ	はい	
下位	変化なし	80.0	63.6	0.241
	上昇	20.0	36.4	
	n	20	22	
中位	下降	30.8	25.0	0.442
	変化なし	53.8	40.6	
	上昇	15.4	34.4	
	n	13	32	
上位	下降	75.0	37.9	0.063
	変化なし	25.0	62.1	
	n	8	29	

表11 父学歴と学力の相対的位置の変化の関係（数学）

国語について見てみると、表12に明らかなように、変化なしグループと移動したグループの間には、いずれにおいても平均値の差は有意ではなかった。

それに対し数学では、2003年に下位グループだった者については、家庭学習時間と父親の学歴ともに、有意な差が見られなかった。しかし、中位グループでは、上昇移動した者の家庭学習時間が変化なしの者に比べて10%水準で有意に長いことが分かる。また、上位

グループを見てみると、下降移動する者の家庭学習時間が変化なしの者よりも5%水準で有意に短い。

03年学力グループ	05年の変化	N	平均値	有意確率
下位	変化なし	38	70.3	—
	上昇	9	103.3	0.220
中位	下降	12	82.5	0.509
	変化なし	13	106.2	—
	上昇	15	130.0	0.515
上位	下降	16	131.3	0.746
	変化なし	27	123.3	—

表12 家庭学習時間と相対的位置の変化の関係（国語）

03年学力グループ	05年の変化	N	平均値	有意確率
下位	変化なし	35	78.0	—
	上昇	14	115.7	0.157
中位	下降	13	85.4	0.908
	変化なし	22	88.6	—
	上昇	13	154.6	0.051
上位	下降	17	77.6	0.018
	変化なし	20	133.5	—

表13 家庭学習時間と相対的位置の変化の関係（数学）

以上のように、個人を単位として分析した場合、学力の相対的位置が固定的な生徒が焼く6割おり、上昇や下降移動する者が約4割いることが分かった。そして、相対的位置が変化したりしなかったりするところにも、社会階層と努力が影響を及ぼしているが、その影響のありようは教科によって異なっていた。先ほどと同様、教科による違いを考慮する必要がありそうである。

6. おわりに

以上、中学1年生時と3年生時のパネル調査によって、学力の規定要因を探ってきた。その結果、第1に、学力に対する社会階層の影響力が中学1年次よりも3年次において強まっていること、第2に、小学校までの内容が身に付いているかどうか、中学卒業時点での学力にも大きな影響を及ぼしていること、第3に、学力の規定構造には科目による違

いが見られること、第4に、個人の学力の変化に着目すると、約6割が固定的、上昇と下降移動はそれぞれ約2割程度であったこと、第5に、個人の学力の変化にも社会階層が影響を及ぼしており、そこにも第6に、教科による違いが見られることが明らかになった。

では、これらのことから、今後の研究の展開に向けてどのような示唆が得られるだろうか。ここでは3点指摘したい。

第1に、個人の移動メカニズムの問題である。出発点のグループが下位、中位、上位のいずれであったかによって、移動に際して異なった要因が働いていることがうかがわれた。それぞれの相対的位置による移動メカニズムの違いが検討される必要がありそうである。

第2に、学力の可塑性と時期の問題である。社会階層などの要因によって学力が固定化してしまう時期があるのかどうか、時期を遅らせたり、早めたりする要因があるのかどうかなど、学力の規定要因を考える際には、時間や時期という要因も考慮する必要があるかもしれない。

第3に、国語と数学という教科の違いをどう考えるかという問題である。教科の性格の問題として必然的に生み出される違いなのか、それとも、教科に関する私たちのコンセプトや教育方法などの問題として構築される違いなのか、学力の規定要因を考える際に、「学力」自体を規定している「教科」のありようにも目を向ける必要があるのではないだろうか。

では、本研究の残された課題を指摘して稿を閉じたい。第一に、調査のサンプル数が少ないため、もっと大きなサンプルによって検討することである。それと関連して第二に、ここで見いだされたことがどのくらいの広がりを持つのか、事例研究にとどめずに探究していくことである。学力テストがさまざまなレベルで盛んに行われるようになった現在、きちんとした分析をしていくことが大切である。

<引用・参考文献>

荻谷剛彦他『「学力低下」の実態』岩波書店、2002年。

荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店、2004年。

耳塚寛明「中学校における教育選抜過程 ―成績の自己評価と進路展望に関する追跡的研究―」国立教育研究所『研究集録』No.13、昭和61年。1-18頁。

耳塚寛明・荻谷剛彦・濱名陽子・庄健二「小・中学校における学校生活の変容過程に関する継時的研究（Ⅰ）」『東京大学教育学部紀要』第23巻、1983年、77-110頁。

第3章 PISA型学力の状況

1. はじめに

近年の学力低下論争（藤田 2006）が盛り上がるきっかけともなった2つの国際学力調査のうち、OECDによる学力調査（PISA調査）は、一般的なアチーブメントテストではなく、いわゆる「思考力を測る問題」であった。これまでの章では、一般的なアチーブメントテストの規定因を探究してきたが、「思考力を測る問題」によって測られるPISA型学力についてはどのような状況にあるのだろうか。

そこで本章では、PISA型学力のありようについて、東京都S区の1つの学校を事例に検討してみたい。

2. 方法

本章のデータは、2006年に東京都S区のC中学校で行ったPISA型学力テストによって得られた。

今回行ったテストは、読解力に関する問題と数学的リテラシーに関する問題の2つである。前者は、PISAの公開問題（インフルエンザに関する問題）であり、各国の平均点も判明している（国立教育政策研究所編 2002）。後者は、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から嶋での人間発達科学」において行われた学力調査（プールに関する問題）であり、複合的な学力を多元的な尺度で測定することを目的としており、調査対象者の平均点も公表されている（お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 2005）。

3. テスト結果の概要

読解力に関する問題と数学的リテラシーに関する問題は、次のグラフのような形で得点が分布している（図1、図2）。すなわち、読解力に関する問題は平均点が3.57点、2点と6点の部分に2つのピークがあるフタコブラクダ型になっている。一方、数学的リテラシーに関する問題は平均点が.96点、5点のところにピークがあり、その後はなだらかに下っていく形になっている。

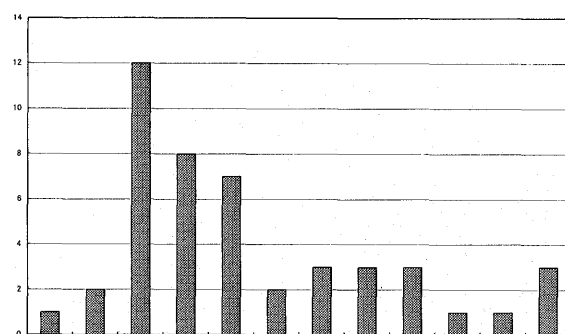
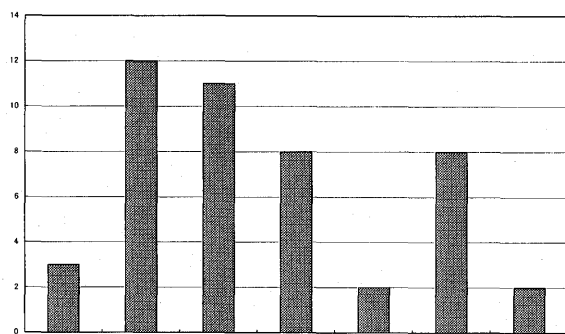


図 1 読解力に関する問題の得点分布 図 2 数学的リテラシーに関する問題の得点分布

では、この得点は全体の中でどのような特徴を持っているのだろうか。まず、読解力に関する問題から見ていこう。表 1 と表 2 は、読解力に関する問題の各国の平均回答率と、C 中の平均回答率を示している。ここから、C 中の平均回答率は、日本全体の平均回答率と大きくは異なっていないことが分かる。しかし、日本全体と比べて C 中に特徴的なのは、問 2 と問 4 における無答率と部分正答率である。すなわち、日本全体は他の国に比べて無答率が非常に高く、部分正答率が低いのであるが、C 中の場合は無答率が非常に低く、部分正答率が高いのである。

	問1	問2				
	正答率	完全正答	部分正答	誤答	無答	正答率
日本	85.8	41.6	5.0	11.6	41.9	44.1
フィンランド	71.8	39.1	15.3	31.8	13.8	46.8
ドイツ	71.9	47.1	9.8	20.3	22.8	52.0
韓国	71.7	31.2	20.7	24.9	23.2	41.6
イギリス	74.7	65.7	7.3	15.4	11.5	69.4
アメリカ	69.7	31.8	13.9	41.0	13.4	38.8
OECD平均	70.7	38.0	13.7	26.7	21.6	44.9
C中	82.6	41.3	15.2	37.0	6.5	48.9

表 1 読解力に関する問題の正答率の比較（その 1）

	問3	問4					問5
	正答率	完全正答	部分正答	誤答	無答	正答率	正答率
日本	38.8	41.3	5.9	29.9	22.9	41.3	54.2
フィンランド	66.3	47.7	6.2	40.7	5.3	47.7	46.8
ドイツ	53.8	25.6	25.5	36.1	12.8	25.6	41.9
韓国	29.6	38.3	20.3	35.6	5.8	38.3	58.4
イギリス	61.1	39.5	21.7	39.3	9.5	39.5	49.3
アメリカ	68.9	37.7	14.5	39.7	8.1	37.7	46.0
OECD平均	53.9	31.1	14.9	41.7	12.3	31.3	45.1
和田中	28.3	32.6	19.6	41.3	6.5	32.6	63.0

表2 読解力に関する問題の正答率の比較（その2）

次に、数学的リテラシーに関する問題を見てみよう。問題の正答率については、お茶の水女子大の研究におけるサンプルとC中の生徒には大きな違いはないと言えるだろう。しかし、0点の部分を見ていくと、お茶大サンプルに比べてC中の割合が低いことが分かる。また、全体の正答率を見てみると、無答の部分がC中では0%となっており、解答への高い意欲を見てとることができる。

	概念的知識		手続き的知識		推論とストラテジー	
	お茶大サンプル	和田中	お茶大サンプル	和田中	お茶大サンプル	和田中
3点	11.2	10.9	22.2	26.1	5.9	8.7
2点	37.1	23.9	28.1	30.4	25.9	21.7
1点	40.4	63.9	36.7	41.3	56	67.4
0点	11.3	2.2	13	2.2	12.2	2.2

表3 数学的リテラシーに関する問題の正答率の比較（その1）

	洗練度		コミュニケーション			全体	
	お茶大サンプル	和田中	お茶大サンプル	和田中		お茶大サンプル	和田中
3点	6.1	6.5	5.2	10.9	正答	6.6	10.9
2点	50.8	50	45.7	17.4	部分正答	21.5	17.4
1点	28.8	37	40.1	71.7	誤答	67.3	71.7
0点	14.4	6.5	9	0.0	無答	4.6	0.0

表 4 数学的リテラシーに関する問題の正答率の比較（その2）

3. 考察

前節の結果をどのように考えたらいいのだろうか。

考察の前提となる条件について検討しよう。C中では第1章で見たように、他の中学校に比べて文化的階層の豊かな群の割合が小さいという特徴があった。そして、一般的なアチーブメントテストの状況であるが、2005年に行った学力テストでは、B中の結果よりも国語の平均点は有意に低く（B中：60.1、C中51.9）、数学については、統計的には有意ではないものの、平均点は低かった（B中：69.8、C中：63.6）。つまり、一般的なアチーブメントテストについては、どちらかというと不利な状況にあり、実際に得点も高いわけではないのである。

しかしその一方で、C中には、総合的な学習の時間において、考えることに重点をおいた授業を行うなどの特徴があり、第1章で指摘したように、階層による意欲格差が縮小している。

ところで、一般的なアチーブメントテストは、定型的な知識の習得や蓄積の度合いを測る「目に見える教育方法」に基づいているのに対し、PISA的な考えさせる問題は、教科横断的な諸知識を動員して総合的に考えさせる「目に見えない教育方法」に基づいている。そして、後者のほうが、文化的階層による格差が大きくなることが指摘されている（たとえば、バーンステイン 1980、藤田 2005などを参照）。

ということは、文化的階層があまり高くはないC中では、一般的なアチーブメントテストで測られる学力よりも、PISA型の学力においてより大きなハンディキャップを負うことが予想される。しかし、今回の結果において、必ずしも正答率が低いわけではなく、むしろ解答への意欲がかなり高いことが示されたことは、文化的階層のハンディキャップにもかかわらず、C中の実践がそのハンディキャップを補償している可能性が示唆されるのである。

4. おわりに

以上のことから、一般的なアチーブメントテストで測られる学力と、PISA型学力のいずれについても、文化的階層と学校での実践のせめぎ合いのなかで形成されていることが示唆される。そしてその両者の間には、学習への意欲が存在している。

今回はサンプル数も少なく、必ずしも十分な考察はできなかったが、これから学力について考えていく際には、一般的なアチーブメントテストで測られる学力のみならず、PISA型学力についても視野に入れて考察していく必要があるだろう。

<引用・参考文献>

バーンステイン、バージル 1980、「階級と教育方法 一目に見える教育方法と目に見えない教育方法―」潮木守一他訳『教育と社会変動 上』東京大学出版会、227-260頁。

国立教育政策研究所編 2002、『生きるための知識と技能 ―OECD生徒の学習到達度調査(PISA)―』ぎょうせい。

藤田英典 2005、『義務教育を問いなおす』筑摩書房。

藤田武志 2006、「学力問題をめぐる言説の構造 ―教育社会学的な学力論のインパクト―」『学校教育研究』No. 21、51-66頁。

お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 2005、『JELS第5集 中学校・高等学校 学力調査報告書』。

【第2部 資料】

中学生の生活と学習についての調査

<おねがい>

これは、テストではありません。みなさんの毎日の生活のようすや考えなどをお尋ねし、これからの学校の学習や生活の改善に役立てようとするものです。楽な気持ちで、思ったことをそのまま応えてください。分からないところや答えたくないところは、答えなくても結構です。

Q 1. あなたの学校名、学年、クラス、出席番号、性別を教えてください。

学 校 名 ()

学 年 () ク ラ ス ()

出席番号 ()

性 別 (1. 男 2. 女) ←○をつけてください。

Q 2. あなたは、家で家族とどのような話をしますか。A～Gのことについて、当てはまる番号に○をつけてください。

よく話す ときどき話す あまり話さない

- | | | | |
|---------------------|---------|---------|---|
| A. 学校の成績や授業のこと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| B. 先生のこと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| C. 友だちのこと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| D. 遊びや趣味のこと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| E. 社会のできごと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| F. 自分のなやみごと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |
| G. 将来の仕事のこと..... | 1 ----- | 2 ----- | 3 |

Q 3. あなたは、次のA～Fのことを家でしていますか。それぞれについて、当てはまる番号に○をつけてください。

	はい	いいえ
A. 朝、自分で起きる……………	1 -----	2 -----
B. 朝食を食べる……………	1 -----	2 -----
C. 朝、歯を磨く……………	1 -----	2 -----
D. 「いただきます」「ただいま」の あいさつをする……………	1 -----	2 -----
E. 前の日に学校の用意をする……………	1 -----	2 -----
F. きまった時間にねる……………	1 -----	2 -----

Q 4. あなたは、自分だけが使うものとして、次のようなものを持っていますか。持っているものがあれば、いくつも○をつけてください。

1. テレビ	2. テレビゲーム機	3. パソコン
4. 携帯電話・PHS	5. 勉強机	6. 自分だけの部屋

Q 5. あなたの家では、次のA～Lのようなことがありますか。それぞれについて、当てはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはまらない
A. 家の人はテレビでニュース番組をみる……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
B. 家の人は私に「勉強しなさい」という……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
C. 家の人に勉強をみてもらうことがある……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
D. 家の人が手作りのおかしをつくってくれる……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
E. 小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
F. 家の人に博物館や美術館に連れて行って もらったことがある……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
G. 家の人はスポーツ新聞をよむ……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
H. 家の人はパチンコに行くことがある……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
I. 家には本がたくさんある……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
J. 家にコンピュータがある……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
K. お父さんは大学を出ている……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
L. お母さんは仕事をもっている……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----

Q 6. あなたは学校のある日に、次のA～Fのことを、だいたいどのくらいしていますか。それぞれについてあてはまる番号に○をつけてください。

	ほとんど しない	15分 まで	30分 まで	1時間 まで	2時間 まで	3時間 まで	3時間 以上
A. 家で勉強をする……………	1	2	3	4	5	6	7
B. テレビをみる……………	1	2	3	4	5	6	7
C. テレビゲームをする……………	1	2	3	4	5	6	7
D. 友だちと外で遊ぶ……………	1	2	3	4	5	6	7
E. マンガや雑誌をよむ……………	1	2	3	4	5	6	7
F. 読書（マンガ・雑誌を のぞく）をする……………	1	2	3	4	5	6	7

Q 7. あなたは、家で週何日ぐらい勉強しますか。あてはまる番号に○をつけてください。

ほとんど 毎日する	週に 4～5日する	週に 2～3日する	ほとんど しない
1	2	3	4

Q 8. あなたは家で、どのような勉強をしていますか。A～Eのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけてください。

	いつもしている	ときどきする	しない
A. 学校の宿題……………	1	2	3
B. 学校の勉強の復習……………	1	2	3
C. 学校の勉強の予習……………	1	2	3
D. 塾の予習・復習……………	1	2	3
E. 通信教育……………	1	2	3

Q 9. あなたは、家で勉強していて、わからないことがあったら、どうすることが多いですか。次のなかから、あてはまる番号を2つ選んで、下の□のなかに、選んだ番号を書いてください。

1. ほうっておく	2. 自分で調べる	<input type="text"/>
3. 親にきく	4. きょうだいにきく	
5. 友だちにきく	6. 学校の先生にきく	<input type="text"/>
7. 塾や家庭教師にきく	8. その他 ()	

Q10. あなたは、家で、どのような勉強のしかたをしますか。A～Eのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	あては まらない
A. 出された宿題はきちんとやる……………	1	2	3	4
B. 授業で習ったこと調べる……………	1	2	3	4
C. きらいな科目の勉強でも、がんばってやる…	1	2	3	4
D. 家の人に言われなくても、 自分で進んで勉強する……………	1	2	3	4
E. テストの前になっても、ほとんど勉強しない…	1	2	3	4

Q11. あなたは、次のA～Fのようなことをどのくらい習っていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください

	習って いない	週 1回	週 2回	週 3回	週4回 以上
A. 音楽（ピアノ、エレクトーン、バイオリンなど）…	1	2	3	4	5
B. スポーツ（野球、水泳、サッカーなど）……………	1	2	3	4	5
C. 習字 ……………	1	2	3	4	5
D. そろばん ……………	1	2	3	4	5
E. 家庭教師に習っている（数学・英語など）…	1	2	3	4	5
F. 塾で習っている（数学・英語など）……………	1	2	3	4	5

Q11 の質問で「塾で習っている」とこたえた人だけにききます。

Q12. あなたが習っている塾は、どのようなタイプの塾ですか。次のなかから、もっとも近いもの 1 つ に○をつけてください。

- | | |
|-----------------|---------------------------------|
| 1. 学校の勉強の復習をする塾 | 2. 学校の勉強の予習をする塾 |
| 3. 受験のための勉強をする塾 | 4. その他 () |

Q13. 学校の勉強と塾と比べてみたとき、次の A～E のことについて、あなたはどのように感じていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

- | | | | |
|------------------------|-------|------|--------------|
| A. 私の勉強にとって必要なのは・・・ | 1. 学校 | 2. 塾 | 3. どちらともいえない |
| B. 私にとって教え方が | | | |
| わかりやすいのは・・・・・・・・ | 1. 学校 | 2. 塾 | 3. どちらともいえない |
| C. 私にとって楽しいのは・・・・・・・・ | 1. 学校 | 2. 塾 | 3. どちらともいえない |
| D. 私にとって気が重いのは・・・・・・・・ | 1. 学校 | 2. 塾 | 3. どちらともいえない |
| E. 私にとってやる気が起こるのは・・・ | 1. 学校 | 2. 塾 | 3. どちらともいえない |

Q14. あなたの学校の授業では、次の A～E のような授業が、どのくらいありますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

- | | | | | | | | |
|---------------------------|------|--------|-------|--------|---|-------|---|
| | よくある | ときどきある | あまりない | ほとんどない | | | |
| A. 教科書や黒板を使って | | | | | | | |
| 先生が教えてくれる授業・・・・・・・・ | 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 |
| B. ドリルや小テストをする授業・・・・・・・・ | 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 |
| C. 宿題が出る授業・・・・・・・・ | 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 |
| D. 自分で考えたり、調べたりする授業・・・・・・ | 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 |
| E. 自分たちの考えを発表したり、 | | | | | | | |
| 意見を言いあう授業・・・・・・・・ | 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 |

Q15. あなたは学校の授業をどのくらいわかっていますか。あてはまる番号に○をつけてください。

- | | | | | | | | | |
|----------------|--------------|-----------------|----------------|-----------------|-------|---|-------|---|
| ほとんど
わかっている | まあ
わかっている | 半分くらい
わかっている | あまり
わかっていない | ほとんど
わかっていない | | | | |
| 1 | ----- | 2 | ----- | 3 | ----- | 4 | ----- | 5 |

Q16. あなたは、次のA～Hのような授業を受けたいですか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても 受けたい	まあ 受けたい	あまり 受けたくない	まったく 受けたくない
A. 教科書や黒板を使って				
先生が教えてくれる授業……………	1	2	3	4
B. ドリルや小テストをする授業……………	1	2	3	4
C. 宿題が出る授業……………	1	2	3	4
D. 自分で考えたり、調べたりする授業……………	1	2	3	4
E. 自分たちの考えを発表したり、				
意見を言いあう授業……………	1	2	3	4
F. けじめがあつて、集中できる授業……………	1	2	3	4
G. 何を勉強するか自分で選べる授業……………	1	2	3	4
H. 教室の外で見学したり				
体験したりできる授業……………	1	2	3	4

Q17. あなたは、ふだん教室で、次のようなことをどれくらいしていますか。A～Fのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはま らない
A. 先生が黒板に書いたことは				
しっかりノートにとる……………	1	2	3	4
B. 授業中、よく手をあげて発言する……………	1	2	3	4
C. 授業でわからないことを				
後で先生に質問する……………	1	2	3	4
D. テストで間違えた問題は、				
しっかりとやり直す……………	1	2	3	4
E. 調べ学習の時は、積極的に活動する……………	1	2	3	4
F. グループ学習の時は、				
まとめ役になることが多い……………	1	2	3	4

Q18. あなたは、学校でいい成績をとるためには、次のA～Eのようなことは、どちらのほうが大切だと思いますか。それぞれについて、1か2か、どちらか近いと思うほうに○をつけてください。

- | | | | |
|----|------------------------------|-----------|------------------|
| A. | 努力 | 1 ----- 2 | 生まれつきの能力 |
| B. | 学校の授業をしっかりと聞く | 1 ----- 2 | 塾や通信教育でしっかりと勉強する |
| C. | 教え方の上手な先生に教えてもらう | 1 ----- 2 | 自分でしっかりと勉強する |
| D. | 毎日コツコツ勉強する | 1 ----- 2 | テスト前にみっちり勉強する |
| E. | 授業中の態度をよくしたり、
提出物をしっかりと出す | 1 ----- 2 | テストでがんばる |

Q19. あなたの学校での成績は、学年のなかでだいたいどのくらいですか。あてはまる番号に○をつけてください。

上のほう	中の上	中	中の下	下のほう
1 -----	2 -----	3 -----	4 -----	5

Q20. あなたは、友だちと、次のA～Iのようなことはありますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

- | | とても
あてはまる | まあ
あてはまる | あまり
あてはまらない | あてはま
らない |
|-----------------------------|--------------|-------------|----------------|-------------|
| A. 友だちと勉強を教えあう…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| B. 友だちとテストの点をきょうそうする…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| C. 友だちと電話やメールのやりとりをする…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| D. 友だちと授業中におしゃべりをする…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| E. 友だちと異性のことについて話す…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| F. 友だちと、夜、出歩く…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| G. 勉強ができる子が、仲間はずれになる…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| H. 運動ができない子が、からかわれる…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |
| I. ファッションのださい子が、からかわれる…………… | 1 ----- | 2 ----- | 3 ----- | 4 |

Q21. あなたにとって、学校での生活は、全体的に楽しいですか。あてはまる番号に○をつけてください。

とても楽しい	まあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない
1 -----	2 -----	3 -----	4

Q22. あなたは、勉強について、次のA～Jのようなことを考えていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはま らない
A. 勉強はおもしろい……………	1	2	3	4
B. 成績が下がっても、気にならない……………	1	2	3	4
C. 勉強は、将来、役にたつ……………	1	2	3	4
D. 何のために勉強するのかわからない……………	1	2	3	4
E. 人よりいい成績をとりたいと思う……………	1	2	3	4
F. 勉強がなければ、毎日がもっと楽しくなる……	1	2	3	4
G. 勉強よりも、自分の長所を伸ばしたい……………	1	2	3	4
H. 今の生活が楽しければ、成績はどうでもいい……	1	2	3	4
I. 有名な学校や有名な会社に入りたい……………	1	2	3	4
J. 有名な学校より、自分にあった学校に進みたい・	1	2	3	4

Q23. あなたは、今の世の中について、どのように考えていますか。A～Hそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	そう 思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
A. だれでも、がんばればがんばるだけ、 人にみとめられる世の中だ……………	1	2	3	4
B. 今の世の中は、金持ちと貧しい人の差が 大きすぎる……………	1	2	3	4
C. 人が貧乏なのは、その人が悪いからだ……………	1	2	3	4
D. 今の世の中では、学校の成績によって 将来が決まる……………	1	2	3	4
E. 有名な学校を出た人のほうが、将来、 自分の好きなことができる……………	1	2	3	4
F. よく勉強した人が、金持ちになれる……………	1	2	3	4
G. よく勉強した人が、いい学校やいい 会社に入れる……………	1	2	3	4
H. よく勉強した人が、しあわせな生活が おくれる……………	1	2	3	4

Q24. 自分自身について、次のA～Rのようなことが、あてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	はい	どちらとも	いいえ
A. 学校の勉強には自信をもっている……………	1 -----	2 -----	3
B. 私はとてもしあわせだ……………	1 -----	2 -----	3
C. 親は私に大きな期待をかけている……………	1 -----	2 -----	3
D. やると決めたことは最後までやりとおす……………	1 -----	2 -----	3
E. 家出をしたいと思ったことが何度もある……………	1 -----	2 -----	3
F. 親は私の気持ちをよくわかってきている……………	1 -----	2 -----	3
G. 先生は私の気持ちをよくわかってきている……………	1 -----	2 -----	3
H. 学校で嫌な思いをしたり、元気がなくなることがよくある…	1 -----	2 -----	3
I. 私はまわりにいる人を楽しくさせることがじょうずだ……………	1 -----	2 -----	3
J. 私はたよりない人間だ……………	1 -----	2 -----	3
K. みんなの前でもはっきりと自分の意見がいえる……………	1 -----	2 -----	3
L. 友だちは多いほうだ……………	1 -----	2 -----	3
M. 難しいことにぶつかった時ほど、がんばるほうだ……………	1 -----	2 -----	3
N. 運動やスポーツがとくいなほうだ……………	1 -----	2 -----	3
O. 音楽や絵がとくいなほうだ……………	1 -----	2 -----	3
P. 自分には人よりすぐれたところがある……………	1 -----	2 -----	3
Q. たいていのことはうまくこなすことができる……………	1 -----	2 -----	3
R. 自分には将来の夢や目標がある……………	1 -----	2 -----	3

Q25. あなたは、将来、どんな仕事をしたいですか。例にしたがって、具体的に書いてください。

例：会社員、先生、プロサッカー選手、花屋さんなど

Q26. あなたは、その仕事につけるとおもいますか。あてはまる番号に、**1つだけ**○をつけてください。

1. たぶんつけると思う	2. たぶんつけないと思う	3. わからない
--------------	---------------	----------

Q27. あなたは、将来、どの学校まですすみたいです。あなたが「こうしたい」と思っているものの番号に、1つだけ○をしてください。

- | | |
|--|------------|
| 1. 中学まで | 4. 短大や高専まで |
| 2. 高校まで | 5. 大学まで |
| 3. 専修学校や各種学校（料理、コンピュータ、
洋裁、デザイン、美容師などの学校）まで | 6. 大学院まで |
| | 7. わからない |

Q28. あなたの家の人は、あなたに、どのくらいまで勉強してほしいとおもっていますか。あてはまる番号に、1つだけ○をつけてください。

- | | |
|--|------------|
| 4. 中学まで | 4. 短大や高専まで |
| 5. 高校まで | 5. 大学まで |
| 6. 専修学校や各種学校（料理、コンピュータ、
洋裁、デザイン、美容師などの学校）まで | 6. 大学院まで |
| | 7. わからない |

Q29. あなたには、次のA～Gのようなことがあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	あては まらない
A. 友だちに理由もなく、いらつくことがある……	1	2	3	4
B. 相手のいやな話でもしっかり聞いている……	1	2	3	4
C. 友だちの話を聞いて、自分も同じ気持ちにな ってしまうことがある……	1	2	3	4
D. 「むかつく」「うざい」「キレた」「きもい」などの言葉を いうことがある……	1	2	3	4
E. いやな気分になったとき、相手に手を出したり 物にあたる……	1	2	3	4
F. 自分の考えや気持ちを うまく表現することができる……	1	2	3	4
G. 腹が立ったときでも、相手に対し言葉を選んで 言うことができる……	1	2	3	4

Q30. あなたには、次のA～Oのようなことがあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

とても まあ あまり あては
あてはまる あてはまる あてはまらない まらない

- A. はじめて会った人とも、
自分から仲よくなろうとする…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- B. まわりの人が困ったり悩んだりしていても、
平気でいられる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- C. 知らない場所で起こった悲しいニュースを
見聞きすると、自分も悲しくなる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- D. クラスや学校以外の場所にも、
同じ年齢くらいの友だちがたくさんいる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- E. 親や親せき・先生のほかにも、
大人の知り合いがたくさんいる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- F. 人の役に立てたり、人と助け合えたりすると、
うれしくなる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- G. 友だちと相談しあったり、力を合わせたりして、
目標に向かってがんばるのが好き…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- H. 必要があれば、やったことがない新しいことにも
チャレンジする…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- I. 困ったことや悩みごとがあるときに、
相談できる人がたくさんいる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- J. 誰かにいろいろ聞かれたり、誘われて一緒に
行動したりするのは面倒だ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- K. 自分が困っているときには、
だいたい誰かが助けてくれる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- L. 知らない人から「友だちになって」と言われたら、
うれしい…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- M. クラスの中でもめごとが起こったとき、
うまくいくように考える…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- N. 自分にもできそうなボランティアがあったら、
参加してみたい…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- O. 友だちから、いろいろ相談されたり、
困ったことを話されたりする…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

＜これで終わりです。長い時間、どうもありがとうございました。＞

〔国語〕

学校名

学年

クラス

出席番号

性別

1	男
2	女

(○をつけてください)

「1」 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 一 用件を承る。
- 二 体裁をととのえる。
- 三 規制を緩和する。
- 四 夕日に映える山並み。
- 五 困難を克服する。

一		
二		
三		
四		
五		

(この欄には何も記入しないこと)

「2」 次の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- 一 フクザツな人間関係。
- 二 ノートをカりる。
- 三 素直にアヤマる。
- 四 自らをカエリみる。
- 五 店のカンバン。

一		
二		
三		
四		
五		

(この欄には何も記入しないこと)

「3」次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒など勧めけるに、氷魚^{注1}はじめて出で来たりければ、あるじ珍しく思ひて、^{注2}もてなしけり。あるじ用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この氷魚の、殊^{注3}の外^{注4}少なくなりたりければ、あるじ、いかにと思へども、いふべきやふもなかりたりければ、物語し居たりける程に、この僧の鼻より、氷魚の一つ、ふと出でたりければ、あるじ怪しう覚えて、「その鼻より氷魚の出でたるは、いかなる事にか。」といひければ、取りもあへず、「この比^{注5}の氷魚は、目鼻より降り候なるぞ」といひたりければ、人皆、はと笑ひけり。

（『宇治拾遺物語』より）

注1 氷魚 鮎の稚魚。二、三センチの色の白い魚。

注2 もてなしけり うちそうした。

注3 物語し居たりける 雑談をしている。

注4 怪しう覚えて 不審に思つて。変だなと思つて。

一 傍線①「あるじ珍しく思ひて」とあるが、あるじは何を珍しく思つたのか。文章中から抜き出しなさい。

二 傍線②「いふべきやふ」を現代仮名遣いに直しなさい。

三 傍線③「いひたりければ」とあるが、だれが言つたのか。文章中から抜き出しなさい。

四 傍線④「人皆、はと笑ひけり」の理由としてもつとも適當なもの^①を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 僧が、たいへん珍しいことができる名人だったから。
イ 僧が、酒を飲み過ぎて何をしたか分からなくなったから。
ウ 僧が、つまらない雑談をいつまでたつてもやめないから。
エ 僧が、ありもしないことを言つてごまかしたから。

一	三
二	四

--	--	--	--

（この欄には何も記入しないこと）

【問題は次のページに続きます。】

「4」次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ペンギンという動物がいる、ということはいの人が知っている。テレビのドキュメンタリー番組で、毎年一度はとりあげられるし、コマーシャルにもキャラクターとしてよく登場する。^① たぶん、大部分の人は「雪と氷の世界」南極に住んでいる」ということも知っているだろう。もしかしたら、動物園や水族館で見たことがあるかもしれない。

現在、世界には約九〇〇〇種の鳥類がいるといわれているが、ペンギンはその中でも特によく知られた鳥の一つだといつてよい。

^② 日本では「人鳥」と書いて「ペンギン」と読ませる場合がある。もちろん和製漢語だが、この鳥の立ち姿が人間に似ているからだろう。しかし、ペンギンを擬人化する傾向は日本人特有のものではない。

欧米におけるペーパーバック・シリーズの元祖ともいわれている「ペンギン・ブックス」が、数ある動物の中からなぜこの鳥を選んだかといえば、「親しみやすくしかも知的なムードを漂わせている」からだという。スイス生まれの有名なクレイ・アニメーション「ピングルー」で使われている言葉は、だれにもわからない「ピングルー」。しかし、世界中のだれもが通訳なしでその会話を理解できる。ここにも「ペンギンは人に近い。」という暗黙の了解がある。

こんなによく知られた鳥なのだが、まだまだ^③誤解や情報不足も少なくない。

たとえば「南極にしかない。」と信じられていること。確かに

南極にはペンギンがたくさんいる。ごく大雑把に言って、世界には六〇〇〇万羽以上のペンギンがいるが、そのうち七〇%近くが亜南極圏以南で生活している。しかし、種類に注目すると、十八種いるペンギンのうち南極でしか繁殖しないものはエンペラーペンギンとアデリーペンギンの二種だけ。亜南極以南に範囲を広げても半数の九種がいるにすぎない。残りの半数は、温帯から赤道直下のガラパゴス諸島まで南半球の広い範囲に分布している。

また、絶滅しそうな種が多いことも知られていない。ニュージーランドにしかないキガシラペンギン、フィヨルドランドペンギン、ハネジロペンギン、南米のガラパゴスペンギン、フンボルトペンギン、南アフリカのケープペンギン。十八種中、三分の一にあたる六種が種としての存続の危機に立たされている。

さらに、日本が世界最大の「ペンギン飼育国」だということも、知る人は少ないだろう。野生のペンギンは南半球にしかない。

だが、動物園や水族館などで飼育・展示されているペンギンは、南北両半球合わせて十五種、一万羽以上いると思われる。日本動物園水族館協会のデータなどから推計すると、二〇〇一年現在、日本では十二種、二四〇〇羽以上が飼われている。世界中で飼育されているペンギンのうち、日本一国でそのへん^④分の一近くを占める計算だ。これに匹敵する飼育個体数をもつ国はない。

特に、絶滅が心配されているフンボルトペンギンの場合、南米のペルーやチリにいる野生個体の数が約一万三〇〇〇羽なのに対し、日本には一二〇〇羽以上がいる。しかも、飼育下での繁殖は順調で、毎年ヒナがすくすく育っている。国内でペンギンを展示している施

設は一〇〇カ所近くあるが、そのうちフンボルトペンギンを飼育している所は七〇以上にのぼる。へ B へ、日本の場合動物園や水族館で出会うペンギンがフンボルトである確率はかなり高いだろう。

一九八〇年代前半まで、日本の「ペンギン・プール」のほとんどに「冰山」があり、その上で温帯にしかない(南極にはいるはずのない)フンボルトペンギンがくつろいでいる、といった光景が見られたのは、そういう事情があったからだ。「ペンギン＝南極」という強力な連想が、寒さに弱いフンボルトに冰山をあてがい、それを見た見学者が「やっぱりペンギンは南極にいるのね。」と納得してさらに誤解を深める。^⑤そういう悪循環が、残念ながら最近まで続いていた。

動物園、水族館の名誉のためにつけくわえておくが、現在ではこういう問題点はほぼ^⑥解決された。展示施設の多くは、展示動物が生息している野生の環境をできるだけ忠実に再現しようという「生態展示」の発想で改修されたからだ。へ C へ、野生地で個体数が減少しへ D へが^{注1}危惧される種に関しては、保全活動に役立つ様々な情報を提供するため、飼育下の個体を利用した調査・研究が積極的に進められている。

先にあげたフンボルトペンギンをはじめとして、飼育下にある全てのペンギンの血統を調査・記録し、繁殖・治療などの管理に役立てようという努力も、九〇年代に入って本格化した。^{注2}稀少な野生フンボルトの約一割に相当する個体数を保有する日本に対しては、生息地の研究者・保護活動関係者ばかりでなく、海外の飼育関係者からも、今後の活動に様々な期待が寄せられている。

注1 危惧＝悪い結果になることを心配し、おそれること。

注2 稀少＝ごくまれで少ない様子。

一 傍線①「たぶん」に係る言葉を文章中から抜き出しなさい。

二 傍線②とあるが、なぜか。文章中から抜き出しなさい。

三 傍線③「ない」と意味・用法が同じものを文章中の波線ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

四 傍線④「誤解や情報不足」とあるが、どんなことか。例として述べられていることを文章中から三つ抜き出しなさい。

五 へ A へに数字を、漢数字で書きなさい。

六 へ B へ、へ C へに入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア B とところで C また イ B しかし C しかも

ウ B だから C さらに エ B したがって C つまり

七 へ D へに入る言葉を、文章中から漢字二字で抜き出しなさい。

八 傍線⑤「そういう悪循環」とはどんなことを指すか。「くこと」という形で、四十字以上五十字以内でまとめなさい。

九 傍線⑥「解決された」とあるが、なぜか。その理由が書かれている一文を文章中から探し、初めの五字を書きなさい。

十 この文章の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 世界にいる六〇〇〇万羽以上のペンギンのうち、七〇%近くは南極圏で生活している。

イ 絶滅が心配されているフンボルトペンギンは、繁殖のために日本で飼育されている。

ウ ペンギンは世界中の鳥類でも特によく知られた鳥であるのに、間違ったことも信じられている。

エ 「生態展示」の発想で、ペンギンの展示施設に冰山をつくり、野生の環境に改修している。

五	四			三	二	一
六						
七						

十	九	八					

(この欄には何も記入しないこと)

〔 数 学 〕

学 校 名

学 年

ク ラ ス

出 席 番 号

性 別

男

女

(○を付けてください)

① $(-4)^2 - 9 \times 5$ を計算せよ。

--

② $\frac{x}{2} - \frac{x}{3}$ を簡単にせよ。

--

③ 連立方程式 $\begin{cases} x - 3y = 8 \\ 3x + y = 14 \end{cases}$ を解け。

--

④ $x^2y - y$ を因数分解せよ。

--

⑤ x の 2 次方程式 $x^2 + ax + 6 = 0$ (a は定数) の 1 つの解が 2 であるとき、他の解を求めよ。

--

この欄には何も記入しないこと。

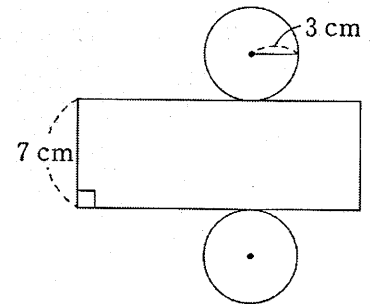
--	--	--	--	--

- 6 1, 2, 3, 4, 5 と書かれたカードが 1 枚ずつある。この 5 枚のカードをよくきって、1 枚ずつ 3 回続けて取り出し、取り出した順に左から右に並べて、3 けたの整数をつくる。

(1) 3 けたの整数はいくつできるか。

(2) 5 の倍数である確率を求めよ。

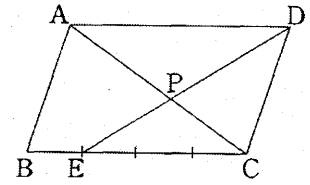
- 7 右の図は、円柱の展開図である。この展開図を組み立ててできる円柱の側面積を求めよ。ただし、円周率は π とする。



この欄には何も記入しないこと。

--	--	--

- 8 右の図のように平行四辺形 $ABCD$ の辺 BC を 4 等分した点のうち、もっとも B に近い点を E とし、線分 AC と DE の交点を P とする。
次の問いに答えよ。



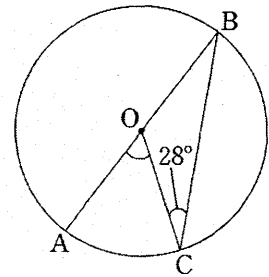
- (1) $AP : PC$ の比をもっとも簡単な整数で表せ。

--

- (2) $\triangle PEC$ の面積を 9 cm^2 とするとき、平行四辺形 $ABCD$ の面積を求めよ。

--

- 9 右の図の円 O で、 AB が直径であるとき、 $\angle AOC$ の大きさを求めよ。

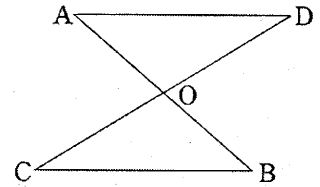


--

この欄には何も記入しないこと。

--	--	--

- 10 2つの線分 AB, CD が、それぞれ中点 O で交わっている。このとき、 $AD \parallel CB$ であることを次のように証明した。 をうめて証明を完成させよ。



[証明] $\triangle AOD$ と $\triangle BOC$ において
点 O は線分 AB, CD の中点だから

$$AO = \overset{\text{ア}}{\text{ア}} \quad \dots\dots \text{①}$$

$$\overset{\text{イ}}{\text{イ}} = CO \quad \dots\dots \text{②}$$

また $\angle AOD = \angle \overset{\text{ウ}}{\text{ウ}}$ (対頂角) $\dots\dots \text{③}$

①, ②, ③ より, $\overset{\text{エ}}{\text{エ}}$ がそれぞれ等しいから

$$\triangle AOD \equiv \triangle \overset{\text{オ}}{\text{オ}}$$

合同な図形では、対応する角の大きさは等しいから

$$\angle OAD = \angle \overset{\text{カ}}{\text{カ}}$$

よって, $\overset{\text{キ}}{\text{キ}}$ が等しいから

$$AD \parallel CB$$

この欄には何も記入しないこと。

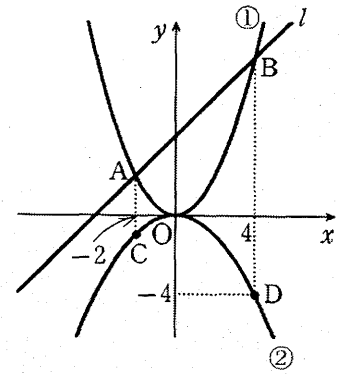
--	--	--	--	--	--	--

- 11 右の図のように、2つの関数

$$y = \frac{1}{2}x^2 \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

$$y = ax^2 \quad \dots\dots \textcircled{2}$$

のグラフと直線 l がある。①のグラフは直線 l と2点 A, B で交わり、点 C, D は②のグラフ上の点である。また、点 A, C の x 座標は -2 、点 B の x 座標は 4 、点 D の座標は $(4, -4)$ である。このとき、次の(1)～(4)の問いに答えよ。



- (1) a の値を求めよ。

- (2) 点 A の座標を求めよ。

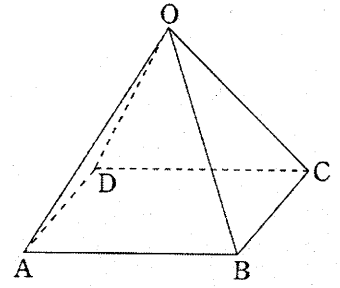
- (3) 直線 l の式を求めよ。

- (4) x 軸上に点 P をとり、 $\triangle BAP = \triangle BCD$ となるようにする。このような点 P の x 座標のうち、正の値を求めよ。

この欄には何も記入しないこと。

--	--	--	--

- 12 右の図の正四角すい $OABCD$ の体積を求めよ。ただし、 $AB=4\text{ cm}$, $OA=5\text{ cm}$ である。



この欄には何も記入しないこと。

【インフルエンザに関する問題】

(制限時間：30分)

学 校 名

学 年

ク ラ ス

出席番号

性 別

1. 男	2. 女
------	------

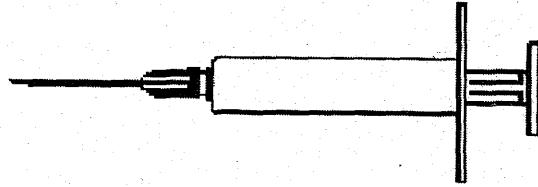
(○をつけてください)

【問題】

ACOL社インフルエンザ予防接種のお知らせ（自由接種）

ご存じのように、冬にはインフルエンザがまたたく間に広がって、それにかかった人が何週間にもわたって体調を崩すことがあります。

ウイルスに負けない最善の方法は、健康で抵抗力のある身体を維持することです。進入してくるウイルスを免疫システムで防ぐには、毎日運動することや、野菜と果物をたくさんとることが非常に大切です。



気づかぬうちにウイルスが社内に広がるのを防ぐ第二の方法として、ACOL社は社員のために、インフルエンザの集団予防接種を計画しました。そこで、11月17日～23日の週に勤務時間内の半日をあて、社内で看護婦が予防接種を実施することにしました。社員はだれでも、この予防接種を無料で受けられます。

接種は自由です。予防接種を希望する社員は、同意書（アレルギー体質でないこと、多少の副作用が出る可能性を了解していることを記したもの）に押印しなければなりません。

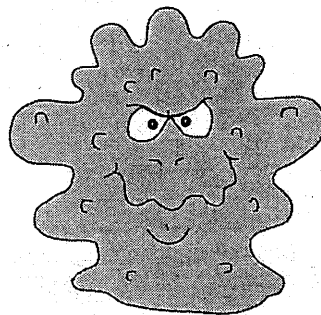
医学的には、予防接種によってインフルエンザにかからなくなるとされています。ただし、だるさや微熱のほか、腕が痛くなるなどの副作用が生じることがあります。

予防接種を受けたほうがいい人

ウイルスへの予防をしたい人ならだれでも。

この予防接種は、とくに65歳以上の人にお勧めします。また、とくに心臓、肺、気管支、糖尿などの虚弱性の慢性病を抱える人には、年齢に関係なく全員にお勧めします。

職場では、だれもがインフルエンザにかかる可能性があります。



予防接種を受けてはいけない人

タマゴに対してアレルギーのある人、急性の熱病にかかっている人、妊婦。

現在薬を飲んでいる人や、過去にインフルエンザの予防接種でアレルギー反応が認められた人は、かかりつけの医師に相談してください。

11月17日～23日の週に予防接種を希望する社員は、11月7日（金）までに人事部の町田まで連絡してください。日時は、看護婦の手配、希望者数、社員の都合を考慮して決めます。この冬にそなえて予防接種を希望していても、決められた日時に都合がつかない

い場合は、町田まで連絡してください。不都合な人が多い場合は、別の日時に実施する場合があります。

詳しくは、町田（内線5577）までお問い合わせください。

健康第一

ACOL社の人事部の町田ふみえは、上に示した通知を社員のために作成しました。この通知を読んで、問1～5に答えてください。

問1

ACOL社の予防接種プログラムについて述べているのは、次のうちどれですか。

- A 冬の間、体操のクラスが毎日開かれる。
- B 勤務時間中、予防接種が支給される。
- C 参加者には、少額の手当が支給される。
- D 医師が注射する。

問2

この通知の**内容**（何を述べているか）について考えてみましょう。

その**スタイル**（内容を伝える方法）について考えてみましょう。

町田さんは、この通知を親しみを込めて誘いかける**スタイル**にしたいと考えました。

うまくできていると思いますか。

通知のレイアウト、文体、イラストなどについて詳しく述べながら、そう考えた理由を説明してください。

《問題は次のページに続いています。》

問 3

この通知では、インフルエンザ・ウイルスを予防するうえで、予防接種はどういうものかといっていますか。次のうちから一つ選んでください。

- A 運動や健康によい食事より効果があるが、もっとリスクがある。
- B 良いことだが、運動や健康によい食事の代わりにはならない。
- C 運動や健康によい食事と同じように効果があり、しかも、問題を引き起こさない。
- D 運動や健康によい食事が十分であれば、あえて検討する必要はない。

☐

問 4

通知の一部に以下のように記されています。

予防接種を受けた方がいい人

ウイルスへの予防をしたい人なら**だれ**でも。

町田さんは、通知を配った後で同僚の一人から、「ウイルスの予防をしたい人なら**だれ**でも」という語句は誤解を招くから、省いたほうがよかったと助言されました。

あなたも、この語句は誤解を招くから、省いたほうがよかったと思いますか。

具体的な理由を示して意見を述べてください。

問 5

通知によると、町田さんに連絡しなければならないのは、次の社員のうちだれですか。

- A 売り場の鈴木さん。生まれつき備わっている抵抗力に頼ったほうがよいと考えて、予防接種を希望しない。
- B 販売の吉田さん。予防接種プログラムが義務かどうか知りたがっている。
- C 郵便課の渡辺さん。この冬に予防接種を受けたいが、2か月後に出産を控えている。
- D 経理課の青木さん。予防接種を希望しているが、11月17日の週は休暇を予定している。

☐

【会員制のプールに関する問題】

（制限時間：20分）

学 校 名

学 年

ク ラ ス

出席番号

性 別

1. 男

2. 女

（○をつけてください）

【問題】

北島君は会員制のプールを利用しようとしています。会員の期間は1年間で、料金には次の2コースがあります。

Aコース：入会金は10000円。

50回目までは無料。51回目からは、1回ごとに400円。

Bコース：入会金は無料。1回ごとに300円。

ただし、1年間は途中でコースを変えることができません。

北島君は、これから1年間何回プールに行けるか予想しながら、どちらのコースにした方が得か、考えています。そこで、北島君に、数学を使ってアドバイスしてあげてください。

(あなたがどのように考えたか、わかるように書いてください。)